

Wa Kon Den Shin 和魂伝心

日本きもの学会会報紙

【第4号】

発行日/平成22年1月5日

【日本きもの学会事務局】

〒600-8009 京都市下京区四条通室町東入

京都産業会館5階

TEL075-211-1346 FAX075-211-0125

http://japan-kimono-association.com/



冒頭の波多野会長による開
会挨拶の後、「グローバル化
の中の現代日本文化」その可
能性」と題する特別講演に
立った、前文化庁長官・青木

保氏は「日本は異質の文化を
受け入れ在来文化と同化して
きた混成文化である。しかし、
服飾に関しては未だ充分な研
究がなされておらず、日本き
もの学会の使命
はそこにあるの
ではないか。私も
興味をもってい
る」という示唆に
富んだ内容の講
演がありました。

分科会I②は「きもの流
通の現状と課題」をテーマに
若林靖永氏（京都大学経営管
理大学院教授）から「きもの
ビジネスはマーケティングに
欠けており、きものビジネス
の再構築のためには使命・顧
客・顧客の価値感・成果」の
四つの課題について明快な問
題提起がされました。

分科会I③は「きもの業
界の発展と課題」をテーマに
若林靖永氏（京都大学経営管
理大学院教授）から「きもの
ビジネスはマーケティングに
欠けており、きものビジネス
の再構築のためには使命・顧
客・顧客の価値感・成果」の
四つの課題について明快な問
題提起がされました。

十六時三十分からは、通常
総会に移り、二十年度事業報
告・決算報告と二十一年度事

第2回「年次大会」盛大に開催 特別講演に前文化庁長官・青木 保氏 4分科会と交流会、情報展示コーナーも

十一月二十八日（土）十三時から、京都私学会館（京
都市下京区）で第二回「年次大会」が開かれました。
参加は、会員と一般合わせて約六〇人。当学会の次
の発展を確認するとともに、特別講演や分科会で「き
もの」文化を再考するひとときを過ごしました。

康管理センター教授）と上林
研二氏（地域生活空間研究所
所長）の発表があり、高橋氏
は「きものは、健康上日本の
気候に適した衣服である」と
実験例を示して詳しく説明。
他方、上林氏は、「嘗て伝統
的な住居は負の遺産であり捨
てることが新生活と考えられ
てきたが、最近では、エコロ
ジー、エコノミーの観点から
も、日本の伝統・文化を受け
継ぎ、人格形成の場となる住
いが潮流となっており服飾の
分野でも同様と思われる」と
結んだ。

分科会I④は「きもの業
界の発展と課題」をテーマに
若林靖永氏（京都大学経営管
理大学院教授）から「きもの
ビジネスはマーケティングに
欠けており、きものビジネス
の再構築のためには使命・顧
客・顧客の価値感・成果」の
四つの課題について明快な問
題提起がされました。

沖縄伝統染織研修が1月28～30日で実施されます 初の研修旅行に予定上回る申し込み、実地研修に期待広がる

日本きもの学会が取り組む「沖縄伝統染織研修」
は、来春1月28日（木）～30日（土）、2泊3
日の日程で実施されますが、初めて取り組む本格的
な染織産地と染織工房の訪問となります。すでに、
参加者は当初計画を上回る多くの方の申し込みを受
け、当学会常任理事の富山弘基氏のコーディネート
で、興味深い染織現場をじっくり見学する予定です。



沖縄の染織は、中国や朝鮮、東南アジア諸国から
の技術を摂取・発展させるとともに、優れた意匠感
覚を表現してきました。しかも、紅型に代表される
染物や緋、紬の織物など、幅広い特徴を持つ染織品
を、それぞれの島や地区ごとに創り
続けてきたことです。それらの多く
は、やがて本土の染織技術にも影響
を与え、わが国染織の「母型」とも
なるものです。

今回の日程で、染織関連施設の訪
問先は、1日目に「城間紅型研究所」
と「那覇伝統織物事業協同組合 首
里工芸館」、2日目は「読谷山花織
事業協同組合 伝統工芸センター」、
「喜如嘉芭蕉布事業協同組合 大宜
村立芭蕉布会館」、3日目は「大城
広一郎織物工房」、「南風原町立南風
原文化センター」、「沖縄県立博物館」
——となっています。

今回の染織研修を案内される富山
弘基氏は沖縄の染織工芸の歴史につ
いて次のようにまとめられています。

沖縄は、1879年（明治12年）
の廃藩置県により沖縄県として日本に編入されるま
で「琉球王国」という独立国家でした。実に、450
年にも及んだ王国時代には、中国や朝鮮、東南アジ
ア諸国、日本をはじめ世界の国々との交易を積極的

に進めており、その中でさまざまな文化を取り入れ
られたことで、15世紀後期より18世紀にかけて琉
球固有の工芸品の数々が豊かに花開きました。

しかし、その琉球王国にとっても豊かな時代ば
かりではありませんでした。1609年
に薩摩の島津氏に征服された琉球は
さまざまな制約を受けることとな
り、八重山諸島では、1637年に琉
球王府によって「人头税」という重
税が課せられました。それは、15
歳以上50歳未満の男女が納税義務
者として、主に男性は米、女性は上
布を納めるというもので、250年
以上を経た1903年にやっと廃止さ
れました。

八重山の貴重な伝統工芸である染
織物は、このように税として徴収
されただけでなく、1945年（昭和
20年）の沖縄戦においては、その
他の数々の文化遺産とともに一夜に
して灰になってしまうほど、過酷な
歴史を経てきています。

しかし、決してわが身を飾るため
に織ったものでなかったしろ、不
思議に爽やかで美しく素晴らしいものです。なお、
染織物に用いられた図柄は「御絵図帳」として現在
に伝えられており、沖縄県立博物館などで実際に見
ることが出来ます。



▼事務局より
本学会では、昨年は「第二回
次大会・総会」を始め、「きもの
文化塾」の開催などに、大勢の方
がご参加いただき大変嬉しく思っ
ております。また、今年早々に、
念願だった「沖縄伝統染織研修」
を実施しますが、予定より多くの
方にお申込みいただき、今から乗
しみにしています。

昨年、スタートしたきもの文化
塾は「きもの学」講座の受講生（受
講歴五年）の方より、講師の
先生の話を一方向的に聞くだけ
でなく、先生と膝を突き合わせて
話を聞き質問できるようなセミ
ナーの開催を行って欲しいとの要
望に答えたものです。昨年は、六
回に亘り開催されました。一、
六回のテーマと講師は、一回「女
紋」（日本家紋研究会理事 森本
景一氏）二回「早弥呼の布」（帝
塚山大学現代生活学部教授 植村
和代氏）三回「きもの健康」（
奈良女子大学大学院教授・医学
博士 高橋裕子氏）四回「加賀
友禅の美学」（加賀友禅「由十
久」語り部 能登一彦氏）五回「
沖縄染織の歴史・文化」（京都伝
統染織学芸会主宰 富山弘基氏）
六回「琉球列島染織紀行」（同、
富山弘基氏）でした。会場は京都
学園大学・京町家キャンパス（京
都市中京区）で、東京・長野・名
古屋・高知・兵庫など遠方から
越えただく受講生もあられ、毎
回満員でした。受講生の皆さんは
講義を聞くだけに留まらず、「日
本の文化、きもの文化」を次世代
の方に伝えたいとの熱い思いで参
加しておられる方も多く、今年
は東京・大阪においても「きもの
文化塾」を実施して欲しいとの要
望を頂いております。社会情勢は厳
しさを増す一方ですが、「きもの
文化」の継承を現代の暮らしの中
でいかに実現しているのか、
今年もチャレンジしていきますの
で、会員各位のご協力をお願い
いたします。（中）



十五時三十分からの分科会
II③では「消費者と共に育
つきもの誌」と題して、鈴木
康子氏（七緒編集長）は「き
もの着用者は普段様々な情報
を求めている、七緒はそれに
応えてきた。今後更に充実さ
せたい」と新しい感覚のきも
の雑誌の発刊の経緯に触れ、
示唆に富んだ内容でした。

更に、II④「きもの業界
の構造変化と対応」と題する
テーマで徳地昭治氏（Fネッ
ト編集発行人）からは、約
四十年間の織物記者時代の経
験談を基に、「きもの業界は
幾多の試練を懸命に乗り越え
てきたが、根本的にファッ
ションとモードとの取り違い
があるのではないか」と指摘
されました。

引き続き、交流会に移り約
三十人が参加。和やかなうち
に閉会となりました。

なお、今回は始めて「情報
展示コーナー」が設けられ、
牛田織物株式会社による「赤
絶（あかあしぎぬ）の復元品
と関連商品」の展示と株式会
社ラポージェによる「ミシン
によるきもの縫製システム」
の実演展示が行われ、来場者
の関心を集めました。

世界に広がるジャパニクル現象、その淵源は日本は異質なものが交じり合った「混成文化」

前文化庁長官・青山学院大学特任教授 青木 保氏

前文化庁長官・青木保氏の特別講演のテーマは「グローバル化の中の現代日本文化―その可能性」。いま、日本のアニメや回転すしなど「ジャパニクル現象」と呼ばれる新しい形での日本文化の「輸出」が進行中で、これは日本の歴史で初めての出来事、との指摘から講演が始まりました。では、日本の文化を幅広く世界の中で捉えたとき、きもの文化はどのような立ち位置が用意されるのだろうか―。講演は、たちまち、聴衆の関心を捉えて進みました。

今、アニメや漫画、ゲーム、キャラクターグッズ、すしや料理など「ジャパニクル現象」といわれ、カッコイイ日本文化が世界中に受け入れられています。また、村上春樹氏の小説は世界中の言語に訳されて読まれていて、ドイツの学生は「村上春樹の小説ははわれわれの問題が書いてあ



日本ほど近代において外来文化の摂取に重きを置いたところもありません。古くからアジア大陸の文化を受け入れてきたから、近代においても西欧文化が受け入れられました。日本人は朝、パンにコーヒ―、昼はカレーライス、夜はフランス料理、こういう食生活をしても何とも思わない。こういう民族は世界中のどこにもない。また、日本人は何でも自分たちのものにしてしまいますが、これもまた珍しい。開かれた受容性があることは強調してもいい。ただ、開かれてはいるけれども、漢字にしても仏教にしても、中国から入ってきたものを自分たちで消化して日本的なものにしてしまう。私は、これを「混成文化」と呼んできま

る」と言います。現代日本の文化がこれほど幅広く世界に受け入れられていっているのは歴史上始まって以来のことです。パリ万博で日本の浮世絵などいろいろな芸術が特に印象派の画家たちに大きな影響を与えたことは良く知られますが、この時のジャパニズムの影響は、一部の芸術

家や芸術愛好家に留まって、若者や一般大衆はほとんど関係ありませんでした。ところが、今のジャパニクルは若者から年輩の人まであらゆる人に好まれているのが大きな特徴です。戦後、日本社会は同質・同類の社会を作りだしました。上下の隔てもほとんどない中間的な社会が出来上がりました。これを私は「中産社会」と呼んできましたが、こういう社会は日本だけのものではありません。欧米には歴然とした階層があり、文化が階層によってはつきりと色分けされて趣味の世界も違います。欧米も本当は戦後日本のような社会を作りたかったのでしょうか、作っていません。これはとて

です。陛下や殿下の和装はどんなのがいいのでしょうか。タイの皇室は基本的には洋装ですが、儀式的な場面では伝統的な衣服を着用されます。日本の天皇陛下にはそれが一切ない。これも現代日本の文化の大きな問題ではないかと思っ

ています。また、日本社会は色彩の変化に非常に乏しいのも特徴です。自分では個性的と思っ

も重要なことです。

ただ、世界で受け入れられている日本文化で高級ブランドは一つもありません。「ユニクロ」「無印良品」は英・仏で受け入れられているようですが、どちらも大衆的な商品です。こうした商品は同類社会でみんな同じだという意識でやっているからできたと考えられます。「ジャパニクル」の範疇には高級ブランドがありません。もちろん日本の中に、高級ブランドは存在しますが、それが世界ブランドとはならない。ジャパニクルの他にも、もつと違つた要素の商品や文化があります。日本の伝統工芸品や美術品、きものや織物の中に、世界的な高級ブランドになる資格を備えているのに、フランスやイタリア、イギリスなど

の高級ブランドが幅を利かせています。ジャパニクルが広がりを見せている今、日本の伝統文化が育んできた非常に高級なもの、きものはその最たるものですが、こういうものを世界に広めていくためにはなにが必要か、ジャパニクルに続く次の戦略を考え

ていくべきでしょう。京都に来ると、きものを着ている方をよく見かけますが、東京では余程のことがないと見かけません。きもの姿が見られるのは歌舞伎座、ここではかなり贅をつくしたきものを着たご婦人方を見かけます。歌舞伎は元々、下町の文化で、下町の商家の奥さんが支えてきたもの

です。自分では個性的と思っ

「日本きもの学会」年次大会に参加して

雑誌「七緒」の新しい視点に触れて

清田のり子さん



五年前、きものに憧れる一消費者である鈴木康子さんが編集長となって創刊した「七緒」は、従来の豪華なきものを紹介する雑誌で

はなく、「おしゃれできものを着たい」という新しい視点の雑誌。それだけに一般消費者、業界関係者共に強い関心が持たれ、多くの参加者を見ました。鈴木さんに、この雑誌の誕生物語から今日までを語ってもらおうと、話し引き出し役を引き受けました。「七緒」は創刊号だけでも三〇〇〇名のアンケート回答者があり、その後も毎号同じ位の熱心な回答が見られる、と言いますから、これからきものを着てみたい初心者を確実に捉えていることがわかります。今回、参加された方から「主旨を曲げずに、続けて欲しい。」とエールが送られました。きもの世界に新しい波を起した「七緒」。同業の私にとっても、そして、きものあり方を考える多くの方にとっても、今後この雑誌のテーマは、多くの内容を投げかけるに違いありません。

一般参加者の声

加藤美恵子さん



「分科会(テーマ:健康と住空間)に参加しました」

健康などの面から見つめることが少なかったので、非常に新鮮でした。とくに、高橋先生の健康面からきものを見る話しは、数字の裏づけもあって、大変説得力があり、素直に聞きました。私にとっては新しい発見で、きもの学会ならではの感じ入りました

松下妙子さん



「きもの建築の講座で触れた、建築ときもの関係では、特にマンションなどでは、きもの暮らしに不都合な面が多々あります。私も、椅子の背もたれで帯の太鼓を崩したり、ドアノブで袖を引っ掛けたり

の経験があります。また、高橋先生の話の中で、きものが苦しいというのは、洋服だっと同じでしょう。着慣れることで楽しくなります、の指摘はわが意を得た感じで大納得です」

前田千賀子さん



「きものに普段から馴染んでいます」

別に、きものをもっと多くの方に着てもらおうと思つと、どうしてもきもの初心者へのアプローチが必要になります。最近の若い人はきものに対して、こんなことも、と思うほどきもの知識がありません。雑誌「七緒」では、そうしたきもの入門者に噛んで含むようにアプローチされているのは大変貴重だと感じています。今回、編集に携わった人のご苦労が直接聞けて、大変参考になりました」

奥村晴美さん



「きもの学会の存在が広く認知されているのが残念です。もっと発信していく必要があるのでしようね。この組織には、きものを

が広く認知されているのが残念です。もっと発信していく必要があるのでしようね。この組織には、きものを